

令和5年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	12	学校名	静岡県立袋井特別支援学校 磐田見付分校	校長名	鈴木 滋夫
------	----	-----	------------------------	-----	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安心・安全な環境	有事への対応力をつける。	・自分の役割を理解し、行動することができたと答える職員 90%	・できた、ほぼできた職員合わせて 100%	A	・事前に役割を明確にした上で、実際に訓練を行う機会を繰り返し設定したことが良かった。また、消防署員からのアドバイスが役割理解につながった。 ・生徒の居住地の危険について、ハザードマップと地図上で確認し、共通理解できた。
	安全教育の充実を図る。	・事故発生時の自分の役割が分かる。	・分かる、ほぼ分かる職員合わせて 94.1%	B	・緊急時対応訓練は、実際に想定した内容だったため、具体的な対応について共有し、深めることができた。 ・いざとなると声が出ない、重要書類の持ち出しを忘れる等があった。今後も、マニュアルを基に自分で考えて行動する訓練の積み重ねが必要である。
	より良い生活を送るための健康と体力を育む。	・実生活に結びつく内容を精選し、主体的な学びができるよう授業を計画する。	・授業を計画できた、ほぼできた職員 100%	A	・教科部会、分掌会、学年会等で定期的に話しをし、生徒の実態に合わせて内容を精選することができた。 ・実際の生活に生かすことについては、生徒の実態により差があり授業後にも個別に働き掛ける等の対応が必要である。
		・よい姿勢週間を意識し、生徒に投げ掛けた職員 90%	・投げ掛けることができた職員、ほぼできた職員合わせて 82.4%	C	・授業開始時に投げ掛ける等、各職員が工夫して取り組めた。 ・担当課からの月1回の周知が徹底できなかった。今後、周知方法や内容を検討する。また、生徒自身が自分で意識できる方法を考えていく。
働く環境	効率的な業務の遂行をし、万全な体制を創る。	・19時までに退勤した率 90%（突発事項への対応は除く）	・19時までに退勤できた、ほぼできた職員合わせて 100%	A	・業務量が重なる時期が予想されるため、あらかじめ業務分担をしておくようにする。 ・業務分担と併せて、退勤時刻にメリハリを付ける等の自己管理ができるよう投げ掛けていく。

様式第3号

教員の専門性の向上	作業学習の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が分かる、できる授業づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業づくりができた、ほぼできた職員合わせて94.2% 	B	<ul style="list-style-type: none"> 作業班会で授業のねらい、流れ、支援等を定期的に話し合うことで、指導方法が明確になった。 生徒の適性を分析して作業工程を考える等の工夫ができた。 更に強みを生かせる授業や製品作りを目指していく。また、生徒の態度面の育成も図っていく。
	教科学習の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 指導計画に評価規準を記入し授業を行った職員80% 	<ul style="list-style-type: none"> できた、ほぼできた職員合わせて88.2% 生徒アンケートの「学校の授業がよく分かるか」の回答は、よくわかる30%、だいたい分かる65% 	B	<ul style="list-style-type: none"> 全体計画（何を教えるか）、年間指導計画（いつ教えるか）、評価規準（目標が達成された具体的な姿）、判断基準（何を押さえて指導するか）を明確に設定しているため、授業の計画、実施、評価、改善がしやすかった。 教科によっては、生徒が授業が難しいと感じており、生徒の実態に合わせた判断基準の設定が必要である。
豊かな人間性	道徳教育の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 指導内容を共有することで、実生活の指導に生かすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生かすことができた、ほぼ生かすことができた職員合わせて88.2% 	B	<ul style="list-style-type: none"> 掲示や学習カードの回覧で指導内容を共有することができたが、継続的に実生活の指導に生かすことは難しかった。 生徒の卒業後の生活を見通した上で、授業で学んだことを実生活に生かすための方策を考えていく必要がある。
交流	生徒の自立する力を伸ばす。	<ul style="list-style-type: none"> 共通の行事及び学年交流以外で共同学習を2回以上実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 委員会活動において、共同のあいさつ運動を2回以上実施できた。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 共同学習実施の際は、事前に生徒の実態や活動内容を伝えグループ핑を工夫することで、主体的に活動する姿が見られた。 一部受け身になる生徒もいたため、今後は両校でねらいを明確にすることで、より主体的な姿を引き出したい。
地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> 地域とのつながりを強める。 本校及び本校の教育課程について周知する。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が製品のアピールポイントを説明することができるよう、意識して授業を行うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業を行うことができた、ほぼ行うことができた職員合わせて94.8% 	B	<ul style="list-style-type: none"> 販売会の反省を基に、生徒自身が製品について話し合い、他のグループの製品の良さを共有する機会を設定することで、製品に誇りをもてるようになってきた。今後も、生徒自身が製品の良さ、学校の魅力を感じられるようにすることを大切にしていく。

様式第3号

関係機関との連携	関係機関との連携の強化を図る。	・実習等にかかわる打ち合わせで活用する。	・できた、ほぼできた職員合わせて94.8%	B	<ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーターを中心に役割分担を明確にしておくことで、必要に応じて迅速に、組織的に支援会議を設定することができた。また、支援機関と家庭をつなげることができた。 ・今後は更に卒業後も見据えた関係機関との連携について考えていく。
		・生徒指導上必要なケースにおいて、関係機関との会議を設定する。	・設定できた職員、ほぼできた職員合わせて94.1%	B	
家庭との連携	家庭との連携を図るため、情報共有を図り。共有する。	・個別面談や進路相談会、便りなどを通じて情報共有する場を5回以上設けることができる。	・設けることができた、ほぼできた職員合わせて100%	A	<ul style="list-style-type: none"> ・個別面談時等に生徒の頑張りを伝え、保護者からも家庭での様子や困っていることを聞き取り、共に解決策を考えることができた。 ・進路に関しての情報共有はできているが、情報量が多いため、便りの発行、掲示の工夫等、学年に合わせた内容提示等、提供方法を考えていく必要がある。 ・家庭との連携方法として、生徒の日々の様子については連絡ノートを活用する。また引き続き、スクールカウンセラーや精神科の健康相談も活用していく。